



## 令和元年度 竹田城跡遺構現状確認調査

令和2年2月8日  
朝来市文化財課

### 1. はじめに

朝来市では、平成29年3月に策定した『史跡竹田城跡整備基本計画』に基づき、平成30年度から本格的な竹田城跡の整備事業に取り組んでいます。

計画2年目の今年は、三の丸通路の整備と大手虎口周辺通路の遺構確認調査を進めています。しかし、過去の調査事例が少なく、遺構の実態に関しては不明な点が多いため、朝来市では史跡の適切な保存と活用を図るために遺構の状況を把握することが必要であると考え、今回の調査を実施しました。

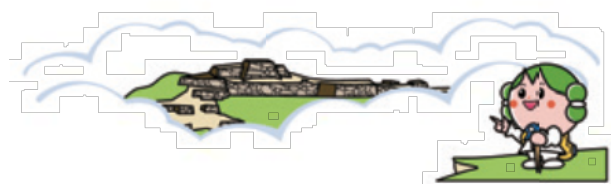
### 2. 竹田城跡の概要

竹田城跡は、兵庫県のほぼ中央部の但馬地域南端に位置する朝来市に所在しており、円山川左岸の古城山山頂一帯に築かれています。但馬・丹波・播磨の国境から程近く、城跡からは山陰道等の主要街道を見下ろすことができることに加え、山麓の城下町が街道を取り込む形で形成されているなど、交通の要衝を抑えることを意図した立地となっています。

竹田城の築城は、鎌倉時代から江戸時代に書かれた『和田上道氏日記』によると、山名持豊（宗全）の配下であった太田垣土佐守の城として築かれ、太田垣氏が7代にわたって城主を務めたとされていますが、永禄12年(1569)以降、織田信長の配下であった木下藤吉郎（後の豊臣秀吉）の攻勢を受け、天正8年(1580)には太田垣氏の支配は終焉を迎えました。

その後、天正10年(1582)に桑山重晴、天正13年(1585)に赤松広秀が竹田城の城主として入城し、石垣の城郭を築造しました。最後の城主となった赤松広秀は天正13年(1585)から慶長5年(1600)までの15年間にわたり城主を務めましたが、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは西軍に属したため、鳥取の真教寺で自刃することとなり、竹田城は廃城となりました。

竹田城については元和元年(1615)より生野奉行(享保元(1716)年以降は生野代官)の管理下に置かれていましたが、江戸時代以降の詳細は不明です。しかし、大規模な破却は免れたようで、城跡の一部石垣は現在まで残されています。昭和18年(1943)に国史跡に指定され、平成21年(2009)の追加指定を経て、現在に至っています。



### 3. 調査の概要

#### (1) 今年度の調査区



【写真1】 調査区全景写真

※今回の調査では石垣の屈曲部を境界として、9つの調査区に分割して調査を進めました。

#### (2) 調査結果

##### ① 第1区

この調査区は北千畳から三の丸へ上る虎口内の階段に該当する部分です。

今回の調査では、竹田城が使われなくなった後に流れ込んだと考えられる、瓦やゴミなどが大量に混ざった流入土を除去し、廃城当時の通路や門扉の痕跡の確認を実施しました。

その結果、調査区内で柱の礎石として使用されていた可能性がある石段が発見されました。さらに、平坦面に瓦や石材が埋められた穴が2か所存在することを確認しました。この穴は、礎石と考えられる石材との位置関係から、門の控柱の痕跡である可能性が考えられます。

また、遺構面を見つけるためのサブトレンチを調査区内に設置したところ、石垣の根石を発見しています。



【写真2】 第1区の平面写真

青線：門扉の礎石と考えられる石材  
赤線：控柱の痕跡と考えられる柱穴





【写真3】第1区サブトレンチの平面写真



【写真4】第1区サブトレンチの断面写真

## ② 第2～4区

この調査区は、三の丸へ上る虎口の枡形部分にあたる場所です。

調査区内の建造物に関する痕跡を探るため、瓦やガラス、プラスチックなどが混ざった流入土を除去し、廃城時の遺構を確認しました。

その結果、この調査区には上部の三の丸から流れてきたとみられる瓦やガラス、プラスチック等が混ざった流入土が大量に流れ込んでおり、石垣の際では最大60cm近く堆積していることが確認されました。

遺構については、第2区で石垣と方向が一致しない溝状の遺構を検出しました。第3・4区では昭和50年ごろまで生えていたマツによる攪乱を確認しましたが、石畳や柱穴、門扉に関する遺構を確認することができませんでした。



【写真5】第2～4区の平面写真

### ③ 第5～9区

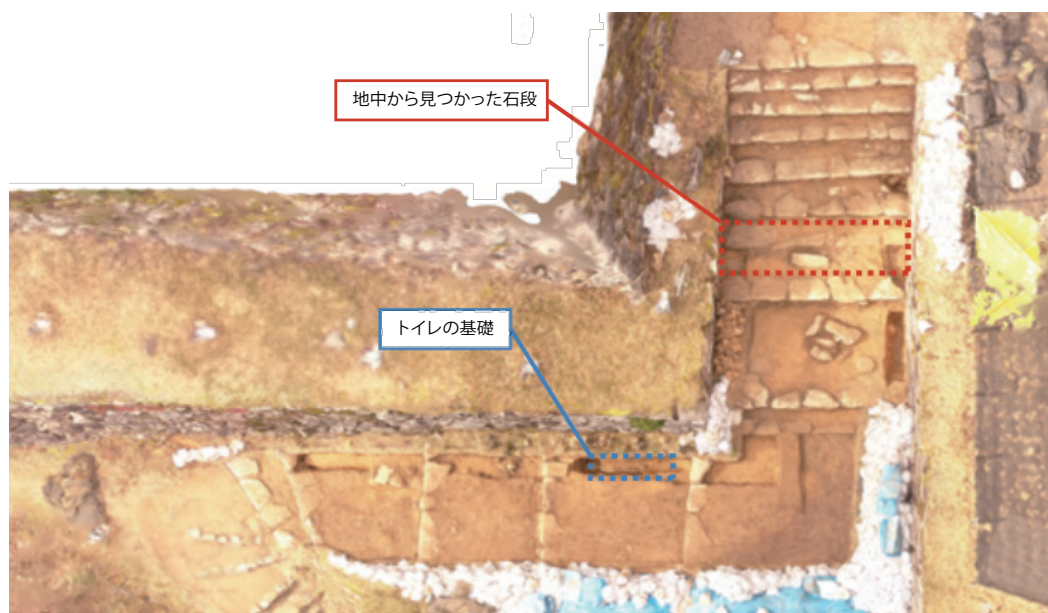
この調査区は竹田城跡の大手道の虎口にあたる部分で、第5・6区の階段部と第7区の広場、第8・9区の階段で構成される、いわゆる柵形虎口と呼ばれる形をしています。

今回の調査では、階段の形状や建造物の痕跡を確認するため、地表にたまっている瓦やガラス、プラスチック等が混ざった流入土の除去作業を実施しました。

その結果、もともと地表に見えていた石段を据えつけるための土に、瓦やガラス、プラスチック等が混ざっていることがわかりました。そのため、地表に見えている石段が廃城後に設置されたものである可能性が生じたため、第5区～第8区に地下の状態を詳細に確認するためのサブトレンチを設定しました。

その結果、第5区の上部を除き、すべての調査区の石段下から瓦やガラス、プラスチックなどが確認されました。また、第5区の下部では埋没した石段が発見され、第8区では地表面に見えていた石段下から昭和60年ごろに撤去されたと見られるトイレの基礎が見つかりました。このことから、第5区～第9区の石段は竹田城の築城当時のものではなく、後世になってから整備されたものである可能性が生じています。

また、第5区～第8区のサブトレンチを掘り下げて廃城時の遺構面の確認作業を行いました。しかし、石垣築造時に造成を行ったと考えられる面を確認したものの、通路遺構を確認することはできませんでした。そのため、今後の追加調査を実施し、大手虎口の姿を確認することが必要です。



【写真6】第5区～第9区の平面写真（赤線：地中から見つかった石段、青線：トイレの基礎）

## 4. まとめ

今年度の確認調査では、往時の通路に関する重要な情報や後世の修理に関する様々な情報を得ることができました。しかし、廃城時の通路や門扉の姿については不明な点も多く、今後の課題も多く残りました。

しかし、この情報は今後の遺構保護工事や見学通路整備を行うための重要な基礎情報であり、来年度以降の整備をより良いものにするために活用していく予定です。

